



西尾洋一／Casa BRUTUS編集長（以下、西尾） みなさんはいつ頃からお知り合いなんですか？

八木保（以下、八木） 僕はサンフランシスコに長く住んでいて、1990年代にアメリカでブルーヴェの家具を買い始めた時、ディーラーから日本にNIGO®というコレクターがいるので会ってみてはどうかと言われました。

NIGO® その後に初めてお会いしたんです。

片山正通（以下、片山） 僕は八木さんを大先輩のデザイナーとして一方的に存じ上げていましたが、1997年に東京で八木さんがグラフィックを担当したカフェのインテリアをデザインして、その時にご挨拶しました。NIGO®さんのお店〈NOWHERE〉のデザインを始めたのも97年でしたね。

西尾 『Casa BRUTUS』が月刊化したのが2000年で、月刊化2号目でジャン・ブルーヴェの特集しました。そこでNIGO®さんのブルーヴェの家具コレクションも紹介しています。

NIGO® 覚えていますが、懐かしいな。僕はブルーヴェの前にイームズの家具を集めていて、その頃にビースティ・ボーイズのマイク・Dから、イームズも良いけど、ブルーヴェも良いよと言われました。それからシュプリームのジェームス・ジョビアにニューヨークで、ブルーヴェの家具を売るギャラリーを紹介してもらって。今では考えられないくらい、どこのギャラリーにもまだたくさん（ブルーヴェの家具が）ありました。

片山 僕はNIGO®さんのアトリエでイームズのすごいコレクションも見ていますし、ブルーヴェが増えていく様子も見ていました。

八木 NIGO®さんのコレクションは本当に珍しいものばかりでした。ニューヨークは世界のマーケットの中心だから、いいものがフランスから渡っていたんです。

西尾 2000年のブルーヴェ特集では、サンフランシスコの八木さんのスタジオや自宅も取り上げました。ブルーヴェの《アントニーチェア》と、サイ・トゥオンブリーの絵を組み合わせていましたね。

八木 アートとファニチャーを合わせて使うのが好きなんです。トゥオンブリーもあの頃は手に入りやすかったですから。



『Casa BRUTUS』2000年12月号に掲載の八木保さんのアトリエ。《アントニーチェア》とサイ・トゥオンブリーの作品。photo\_Stefano Massei



DESIGN

八木保×NIGO®×片山正通  
（Wonderwall®）が語る『ジャン・ブルーヴェ展』とその魅力。

August 24, 2022 | Design | casabrutus.com | photo\_Masanori Kaneshita © ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 C3924 text\_Takahiro Tsuchida

〈東京都現代美術館〉で開催中の『ジャン・ブルーヴェ展 椅子から建築まで』。2022年7月30日、展覧会を記念して行われたCasa iD会員限定のトークイベントに、本展の共同企画者でもあるアートディレクターの八木保、ファッションデザイナーのNIGO®、インテリアデザイナーの片山正通（Wonderwall®）が登場。それぞれの視点でジャン・ブルーヴェの魅力を語った特別なイベントの様子をレポートします。



八木保 アートディレクター。1991年〈Tamotsu Yagi Design〉をサンフランシスコにて設立。2000年に世界初のアップルストアのコンセプトデザインを手がけ、その後の店舗デザインにおいてもアートディレクションを担った。本展ではギャラリー・パトリック・セガンと共同企画を手がけるとともに、広報物もデザインした。

（左）《「メトロポール」チェア No. 305》1950年頃 Laurence and Patrick Seguin collection、（右奥）《「ゲリドン・カフェテリア」組立式テーブル》1950年 Yusaku Maezawa collection、（右奥）《「カフェテリア」チェア No. 300》1950年 Laurence and Patrick Seguin collection

西尾 今回の展覧会は、八木さんとパリのギャラリストのパトリック・セガンが共同で企画していますね。みなさんはセガンさんのギャラリーでも購入されていたんですか？

NIGO® はい、割と買ってきました。

八木 僕も最初はアメリカで探したり、パリのギャラリーからインベントリー（作品目録）を郵送で送ってもらったりしていましたが、ある時にパリの家具はパリのギャラリーで買わないとダメだと気づいた。パリの空気感の中で直接、説明してもらって買うようになりました。



トークイベントの前に展示を巡った3人。ブルーヴェの代表作で、30年代から多くのバリエーションが生まれた名作《スタンダードチェア》を間近で見る。© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 E4840

1 / 2



片山 僕もNIGO®さんのコレクションを見ていて欲しくなっちゃって、パリに行った時に訪ねました。倉庫みたいに大きなギャラリーで、パトリックにブルーヴェの入門編を教えてくださいと言ったら、《スタンダードチェア》を見せてくれて。2006年で100万円くらいだったかな。でもあの椅子は1脚では絵にならないから、近くにあった《アントニーチェア》にするとしたら、特別な値段にするとと言われて200万円ちょっとでした。本当に安くしてくれたかどうか分からないですけど。

八木 それは分からないですね（笑）。



『Casa BRUTUS』2017年9月号に掲載の『片山正通の百科全書』展示風景。背後の《サンシャッター》は現在はWonderwall®のオフィスに展示してある。photo\_Keisuke Fukamizu

1 / 2



西尾 『Casa BRUTUS』2008年10月号のコレクター特集にもNIGO®さんのアトリエが載っていました。

NIGO® あのアトリエは家具のほとんどがブルーヴェのものでしたね。床暖房だったせいで、テーブルの天板が曲がってしまったこともありました。でも以前、八木さんとお話した時に、家具は使い込んで味が出たもののほうが好きだと聞いて、自分と同じだと思いました。

片山 そうやってNIGO®さんが日常的に使っているのをデフォルトとして見ていて、いい家具だなとブルーヴェに興味を持つようになったんです。八木さんも実際にブルーヴェの家具を使っているのを本などを通して知っていたので、いいなあと思っていました。



『Casa BRUTUS』2008年10月号に掲載のNIGO®さんの当時のアトリエ。《スタンダードチェア》がズラリと並ぶ。photo\_KOZO TAKAYAMA

1 / 2



西尾 八木さんのスタジオには、2012年のアップルの特集でもカーサブルーダスが取材に行きました。スティーブ・ジョブズが八木さんにアップルストアのコンセプトを依頼していたので、そのお話を聞きに。その特集に写っているテーブルが、今回の展覧会にも出展されています。

八木 ドクター・ヴィシャードという人の自宅のためにブルーヴェが作ったもので、ガラスの天板の下に電灯があって光るといって、とても珍しいものです。今回のためにアメリカから運んできました。



『Casa BRUTUS』2012年3月号に掲載の八木保さんのアトリエ。右下のテーブルが《ヴィシャード医師のためのテーブル》。photo\_Yoko Takahashi

1 / 2



〈東京都現代美術館〉のアトリウムに設置された《F 8x8 BCC組立式住宅》は、ビエール・ジャンヌレとの共作で1942年発表。この展覧会では、その様子を上から鑑賞できる。Yusaku Maezawa collection

1 / 4



西尾 モノをコレクションするのは3人の共通点ですが、それは仕事にどう影響していると思いますか？

片山 僕の場合は、買い物も仕事も同じベクトルを向いていて。一番楽しいのはデザインすることですが、いわゆる仕事という感覚ではないんですよ。また、お店のデザインをすることも多いので、ものを買う時の喜びや感動を自分で味わっていないと、相手に提案できませんし。コレクションしようと思っただけではないのですが（笑）、好きなものに囲まれて生活するのが大事というか、それがないと絶対に無理。おふたりも同じだと思います。

NIGO® 自分の仕事は考えることなので、ベストな環境の中でデザインしていきたい。基本はアパレルだから家具から直接影響されることはありませんが、分からないところで影響があるかもしれませんね。

八木 環境はすごく大事で、だからブルーヴェも子どもの教育のために学校の建物や家具を作っていました。そして彼の家具は、グラフィック、ファッション、インテリアをはじめ、映画関係者からストリート系まで幅広いジャンルの人がコレクトしています。ひとりの作家がこれだけ幅広い人から愛されるというのは、すごい魅力だと思います。



ブルーヴェの貴重な映像が見られるコーナーは、フランスの体育センターで使われたブルーヴェ作品《折たたみ机付き講義室用ベンチ》に実際に座ることができる。

[公式サイト](#)

片山 フランスから事務所に《アントニーチェア》が届いた時、経理スタッフに「錆びてますから返品しましょうか」と確認されました（笑）。200万円もするのにと、ビックリしてましたね。でも今の値段と比べるとものすごく安い買い物でした。コンディションもよかったですし。

八木 僕のところも家具のコンテナが来て、アシスタントにちょっときれいにしておいてと言うと、錆を取ってきれいに磨こうとすることがあります。でもそこまでやるのはよくない。今回の展覧会は、当時のオリジナルのものが揃っているから、近づいて見るとどれも迫力があります。椅子なら裏側まで見えるようにディスプレイしました。



1949年発表の《「メトロポール」住宅（プロトタイプ、部分）》のファサードの前に立つ3人。Laurence and Patrick Seguin collection

1 / 2



西尾 NIGO®さんと片山さんは、この『ジャン・ブルーヴェ展』をご覧になってどうでした？

NIGO® 僕の中ではブルーヴェは家具のイメージが強かったんですけど、改めて建築のすごさを感じました。彼の建築の仕事をこれだけの量で見たのは初めてでした。

片山 ブルーヴェは僕らの業界では教科書に載っているような人ですが、八木さんに説明いただきながら見ると、知らなかったことがたくさんありました。見ただけでは分からないことや、合理性だけではない奥行きがあるんです。あとは、NIGO®さんのアトリエで普通に《スタンダードチェア》に座って打ち合わせをしていましたが、あれは贅沢だと気づきました。飲み物をこぼしてもNIGO®さんは怒らないし（笑）。

NIGO® 気にしないっていうか、それが家具の歴史になっていくので。

